

西遊夢錄

(六)

瀧川規一

(VII) アバヂーン(Aberdeen)

その二

蘇國人だとして決してコーカニーな金錢について意地汚いとは恨ならないのだが、どうした譯か、コーカニーと云へば蘇國人を意味し、蘇國人と云へばコーカニーを意味するやうになつてゐる。最近或る慈善の目的で著はされた小冊子がある題して「アバヂーンの吝嗇坊話」と云ふ。序言には半ば冗談口を利用して次の如く云つてゐる。

「廣く世間に知られて居らず、花崗岩の都にても多く人に知られないが、アバヂーンに一つの俱樂部がある。その目的は自分等及び同胞の市民を話柄にして話草を製造することを以て主なる目的としてゐる。この俱樂部の創立者はアバヂーン人である。彼が一般蘇國人、特にアバヂーンの同胞を話柄にして話をしたが、知友とする英蘭人は彼の話すことは何でもかでも信じて了ふと言ふことを發見した。英人等がふき出して面白がるのに元氣づけられて話をばつまずと、同様の精神をもつものが彼の周圍に集つて來た。俱樂部は斯くの如くにして生れた。この小冊子に集められた話の大半は上述の俱樂部

部の記録から拔萃したもので、今や冊子の形となつてあらはれたから、一般讀者は會員の熱心なる努力の果實を享樂し得られるであらう」と云つてゐる。これはE博士の著書である元よりそんな俱樂部のあらう筈がないが、蘇國人なら曠かし斯くもあらんと英蘭人の信じさうな話草を製造したのである同僚はこの小冊子を見て「燒き棄てよ」と云つたが、燒き棄てるのはコーカニーの本旨に背く。茲にその幾分を紹介する(1)米國の漫遊客が蘇國を旅行してゐたが、蘇國の北部地方で道を失つた。間もなく或る大都會の郊外に辿り着いた。自動車を止めて、遊んでゐた小供に町の名を聞いた。小供は、「サツクスヘンス *saxpence* 六片を呉れるなら教へてやう」と答へた。これ丈けを聞いた米人は直に廻轉手に「車を驅れ、これは多分アバヂーンだらう」と云つたさうである。

(2)猶太人とアバドニーアン(Abrdnian アバドニー人のこと)と共同組合の營業をはじめた。六ヶ月の後にその組合が解散した。お互のコーカニーを監視し合つたので兩人共盲目になつたからである。

(3)教會の禮拜が先達ての日曜日にはラチオで放送された。勤儉なアバドニーアンは之を聞いた。讚美歌も祈禱の文句も、

聖書朗讀も、説教も、面白いと思つてゐた。然し「これから喜謝金を集めます」と云ふ段になると、惶てふために、イアン(受話機の耳にあてるもの)を外して了つた。

(4) アバチーンに大競馬があつたが誰一人として競馬を見なかつたと云ふ話を讀者諸君聞いたことがありますか? その日には人が皆賭け札ばかりを見つめて居つて競馬そのものを見なかつたのです。

(5) 二人のアバドニーアンと一人の猶太人が倫敦で無料講演會だと思つて或る講演を傾いてゐた。講演の途中で喜謝金を集めに來た。猶太人は夫を聞いて氣絶した。二人のアバドニーアンは猶太人を昇いで會場を出た。

(6) 一人のアバドニーアンは一人の英蘭人に聞いた。「一體アバドニーアンは何故に滑稽なことを云ふ才能をもつてあるかを知つてゐるか?」英人は答へた。「その才能は天賦の才であるから」。(註に曰く。天賦の才には金が要らぬ。)

(7) 或る英人がアバドニーアンに問ふた。「一体アバドニーアンにはどれだけ酒量があるか?」アバドニーアンは悲しく答へた。「或る與へられたる量を飲みます」。幾何學では「或る與へられる一點ありとせよ、然らば……」てなことを常に云ふさてそれから間もなくアバドニーアンは英人について酒屋に入つたが即刻また出て來た。英人が金をもつてゐなかつたので「與へられなかつた」からである。酒屋の門口を出るや否や消防隊が疾驅するのを見た。

アバドニーアンは叫んで云つた。「要らぬお世話つかいな火消し

だ」。(註に曰く。消防隊の爲めに燈火の節約を仕損じたり)。(8) グラスゴ市の一ホテルの出來事である。ホテルの鼻眼鏡の支配人が毎夜のこと最後の巡廻をした。靴磨きの小僧が客室の戸口で靴を磨いてゐるのを見付けた。「それはいいね、靴を磨くのは下に行つて磨いて來なさい」と叱りつけた。「小僧は答へた」「でも室内からアバドニーアンが靴の紐をひつぱつて居ますから」と。(註に曰く。靴を磨けば二片をやるのが習慣である。それを吝んで、磨き終るのを待つて、室内に靴をひつぱり込む算段)。

(9) 近頃ダンチー(Dundee)と云ふ町に行つたアバドニーアンがあつたが、海邊に鷗が澤山飛んで居るのを見て、「あれは何と云ふ鳥か」と人に聞いた。鷗だと教へられると、「鷗は何で生きてゐるか」とまた聞く。河に流れて來る魚の肉切れや町の附近にある食物の切れを食べて生きてゐる」と教へられた。アバドニーアンはこれを聞いて變に思つた。さうして云つた。アバチーンにはそんな鳥を見たことがない」と。(註に曰く。アバチーンの市人は一物も餘さず喰ふ)。

(10) アバドニーアンがゴルフに熱心になつてゐるのを見て英人は驚いた。「どうしてゴルフがあなたに面白いのですか?」アバドニーアンは答へた。「ゴルフはそんなに悪くないね、球を四つ失つたが、六つ拾つた」と。

(11) 花崗岩の一市民は浮世が厭になつて自殺をしやうとした自殺の方法には瓦斯窒息の方法が最善なりと考へた。隣家には瓦斯をとりつけてあるので其處へ行つてこつそり部屋に入つた。が火に困つたと註に曰く、瓦斯メートルの箱の孔に

一志の銀貨を入れなければ五斯が出て来ないことをはじめて知つたからである。

(12) アバチーンが目貫きの街でユニオン通りと云ふのがある突然通行止めになつた。荷馬車の馬がどうしても動かなくなつた爲めである。やつと馬をすかして隻脚をあげさせた。するとその足の下に六片の銀貨が落ちてゐた。(註に曰く、アバチーンは馬亦金を知る。)

(18) アバドリーニアンとヨークシヤ州の男とがハル (Hell) と云ふ町で宴會があつて出席したが、二人とも時刻より早く行つた。さうして二人共喉が乾いて何か飲み物を欲しいと思つたが、生憎金を持つてゐない。ヨークシヤの男は云つた「バーに居る女で、人の話に聴き惚れると勘定を忘れる女が居るそれに話して飲み物を注文したらどうだ」と。早速アバドリーニアンはバーに行つてウイスキーを一杯注文してヨークシヤの男と一緒にバーの女を捕へて話し込んだ。話の途中アバドリーニアンは急に立ち上つて「ああ、俺は歸らにやならぬが俺のお釣りを貰つておいて呉れ」と云つて、ヨークシヤの男を後に残してさつさと出て行つたさうである。

(14) アバドリーニアンがグラスゴ市の一女を訪問したが、先方の好意にほだされて二週間も泊り込んだ。主人の方では飽きと氣疲れとが起り始めた。それを悟つたアバドリーニアンは御眼することになつた。非常に愉快に日を送らして貰ひました實に懇な待遇をうけて感謝してゐます。お家も良い、食物もよいし、頂いたウイスキーもよかつた、シネマもよかつたし

芝居もよかつた、どう御禮を申してよいか判らぬ程です、家に歸つたら鶏をお禮に一羽お送りします」とて謝辭を述べた主人が停車場まで友人を見送つて行つて、お別れに停車場のバーで一杯傾けやうと云つた。アバドリーニアンはそれに答へて「いや、今まで何から何まであなたに拂はして居るだから今度は一つハンカチ、ヨーカを試みて拂ひ手、決めませう」と云つた。一週間たつても二週間経つてもアバドリーニアンからは何の音沙汰もない。其後市場で其アバドリーニアンに偶然出會はした「ね君先日のお話の鶏はどうなつたかね」と尋ねると相手のアバドリーニアンは「ウン送らうと思つてゐるが、未だ鶏が死にやらんのだ」とすましたものであつた。

(16) アバチーンで或る時小供が水中に溺れた。父親は「誰か救ひ出して呉れる者に五志をやらうと云つた。それを聞いた一人の男がじやんぶと飛び込んで、小供を救ひ出し、人工呼吸を施して漸くのことに小供は一命をとりとめた。すると父親は二志半を與へた。救つた男は「そんな筈がない。五志をやらうと云つたぢやないか」と詰問すると「でも小供は全部息の根が切れてゐなかつた。半分息の處を救はれた丈ぢや」と云つた。

(16) 三人の男が共謀してアバドリーニアンにお酒一杯をおごらさうと計畫した。之れで四人連れ立つてバーに入つた。四人が皆一杯宛飲んだ頃になると、給仕人が来て、客の名を呼ばつて誰某さん居られますかと云つた。「俺がそれだ」と答へた。「只今奥様が見えて玄關で待つて居られます」と給仕人は

云ふ。アバドニーアンはそれを聞くや否や急にあはせて立ち上り、「今晚は素敵な晩だつた、皆さん失敬」と云つてさつきと引き上げた。(註曰く、おごらす等のが逆におごらされた話である。)

(17) アバザーンの小供が父親にアイスクリームを買ふお金を呉れとせがんだ。すると父親は小供に向つて幽霊話をし出した小供にはあまりに恐ろしい話なのでぞつと寒氣がしてアイスクリームが要らなくなつた。

(18) ニッカーカスル(Newcastle)の船渠で働いてゐるアバザーンの男が一日輪轉船に片手をひつかけて手が切斷された程重傷を負ふた。早速本人は病院に昇つぎ込まれる。朋輩の職工尖はれた手を見出さうとて鋸屑のなかを捜したが一向に見つからない。そのうちに一案を案出するものがあつて其通りにした。三片のお金を鋸屑の中にもり投げるとお金をつかみに片手が飛び出して來た。

(19) 船の甲板の椅子の使用料は三時間二片の割の貸賃であつた。アバザーンの男に向つて「一つ椅子を借らうぢやないか」と云ひかけた男があつた。するとアバドニーアンは早速答へた。「一體三時間も誰が坐つてゐることが出来るか?」と。

(20) アバザーンの或る學校の附近に養鶏場があつた。餌を見付けた雄鶏はいつも雌鶏を呼んでそれに食べさせた。雌鶏は餌を見つけても決して雄鶏を呼ばなかつた。學校の生徒等はそれを見て、いつも雌鶏をこすい奴だと憎んでゐた。或る日男の先生が途上で二人の小供が喧嘩し、握み合つてゐるのを見

見た。勝ちさうな方の小供の耳朶を握んで引き分け、何故に喧嘩してゐたかと先生は聞いた。小供は答へた。「先生は雌鶏程の頭さへ持つてゐないと今向ふへ逃げる奴が云つたので、俺は先生がもつてゐると云つた。それで喧嘩したのだ」と。

(註に曰く、持つて悪し、持たなくて悪しとはこの事なり)  
(21) 一人のアバドニーアンが睨目して天國の門口まで行つた門の番をしてゐる聖ヒータは「お前どこから來たのか」と尋ねた。「アバザーンから」「それではどうして此處に來る資格があるかと信じてゐるのか」とヒータはまた尋ねた。「一生のうちは一度他人にビールを一杯おごつてやつたことがあるから」「それではよく調べて見よう」とヒータは云つて、過去罪業帳を調べると成程その通りである。ヒータは門口でビール代の四片をつき出して、再びアバザーンの男に向ひ「これはお前にかへしてあげる。天國ではこれだけのお金ではお粥も噉れぬから」と云つた。

(22) 或る時一人のアバドニーアンと一人の英人とがバーでビールを注文した。どうしたことか一方のコップに入つてゐるビールの量が他のコップのよりも少し少い、さうして少い方がアバドニーアンの方に置かれた。アバドニーアンは英人に向つて云つた「君、地球がこんなに廻轉することを知つてゐるか」と云ひながら片手を大量の方のコップと少量の方のコップの周圍にまわした。英人はアバザーン人の氣質を知つてゐるので、一回二つのコップの周圍に手を廻した時に早速と大量の方のコップを手に握つて放さなかつた。さうして云つ

た。「地球は現状維持の方がよいね」と。(註)に曰く、英人は危  
い處で大量のビールを飲み損ねる處だつた)。

(23)市電の車内に一人の美しい娘が坐つて居つた。それを  
見た男が他の連れの男に向つて「あの娘はどこかの娘か知つて  
居るか」と問ふた。すると問はれた男は斯う答へた。「さうね  
あれが、乗車賃を拂ふまで待つて居なさい。さうしたら判る」  
と。

(24)同じく電車のことについてであるが、一人のアバチーン  
の男が眞剣に怒つた様子をして他の連の男に話をしてゐる。

「俺は昨日全く車掌に侮辱された」「それはどうしてである」  
「俺が乗車賃を拂はぬかのやうに車掌奴が俺の額をにらみつ  
けた」「それで君はどうした」「俺もまた拂つたかのやうにに  
らみ返へしてやつた」。

(25)アバチーン人の格言に曰く、他人が一杯おごつて侮辱す  
るなら、その侮辱を囓み下せ」と。

(26)アバチーン人は政治についてはいつも鋭い頭をもつてあ  
る人の政黨を見別けることも至極簡單である。人が親切で温  
情であるなら、その人は保守派であり、一杯の酒をおごる程  
の人ならリベラル黨であり、おごられた酒を受ける人なら、  
労働黨である。

(27)ア市の街路が人で一杯になる日がある。それは地方的な  
慈善事業の爲めに寄附金を募集する日である。町中の人が一  
人も残らず寄附を集めに歩くと。(註)に曰く、寄附を申し込ま  
れる人が一人も家に残つてゐない)。

(28)居牛場で英人が一疋の牛を殺した。その時腹から六片の  
銀貨が出て來た。不思議に思つて調べて見ると、それはアバ  
チーンから來た Aberdeen Angus Bullであつた。(註)に曰  
く、畜生までがヨークカーである)

ヨークカーの次ぎに蘇國人の特徴として英人に田舎者扱  
ひにされることである。老人が得意に讀み聞かしたのは蘇國  
人が倫敦のホワイトホール宮殿前の騎馬哨兵を見て感心した  
話である。

倫敦に行つた人は誰しも一度は見物に出かける處であるが  
ホワイト、ホルルの門前に熊の毛の高帽と、赤服の哨兵が、  
抜剣で不動の姿勢をいつもとつて居る。或る時極東に行く一  
人の蘇國人が倫敦見物の序に見物し、哨兵の不動の姿勢に感  
心して暫く見入つてゐた。蘇國人はそれから三十年後に亞細  
亞から歸つて來て倫敦に入るやまたその騎馬哨兵の處に來た  
彼は頰をあげて叫んだ。「おや、俺が以前に見た時から未だ動  
かずに立てゐる哩！ お前はその間すつと立ち續けてゐたの  
か？」と。

蘇國人は馬鹿者扱ひに英人からされてゐるが、冷靜で話の要  
點を捕へるに妙を得てゐる。

或る時印度から歸つて來た一人の息子が爺に自分の結婚せ  
んとする女の美點を舉げて、爺の同意を得やうとした。息子  
は云つた。

「彼女は若くて、非常に金持ちで、またその上に非常に美人  
である」と。

父爺はその言をちつと聴き込んで居て只一言云つた。

「それではどちらかに何か誤解がありまうだね」

果してその婦人は病弱な人であり、男は豫期した程の成功者でなかつたことが後に判つたと云ふ。

蘇國人は他人から「あなた音楽をおやりになりますか」と問はれる時にいつも「ちやうとも限りません」と返事する程に、返事には用心深い。或日のことに何十年とない程な暑であつた。英蘭人がその日乗合自動車に乗つて來た。その様子を見ると汗水垂らして埃まみれになつてゐる。英人は車内の人に向つて「暑々しい暑さですれ」と云つた。乗客一同が無言であるのを見て其處に居合はせた蘇國人は口を開いて。

「さうですれ、さうかも知れませんが、然し」と答へた。後で考へると、どつちともつかぬ慎重な返事である。

蘇國訛りの爲めに英人から笑はれる材料は随分澤山ある。一體蘇國訛は母音が特別に耳に響く。或る時一人の蘇國人が倫敦の同國人の反物屋の店頭に立つた。さうして毛織地を手にとり。

Oo? (wool? 羊毛か)

と尋ねた。店の主人は

Ay, Oo. (Yes, wool. 羊毛か)

と答へた。するとまた。

A' Oo? (All wool? 純毛か)

と尋ねた。主人の返事には

Ay, a' Oo. (Yes, all wool. (羊毛です、純毛です))

とある。更に聞きた。

A' ae Oo? (All same wool? (毛の種類は同じ純毛か))

返事にはまた

Ay, a' ae Oo. (Yes, all same wool. (はい、同じ種の純毛です))

アイ、エ、ア、オの母音だけで對話が出來たのである。

こんな話が毎夜暇ある夜に蘇國訛で朗讀されたり、話題になつたりする。或る時は老夫婦が若き頃の寫眞を見せ「時が人を老しめる」てな達觀したやうなことを口にする。

一日二日寄食する豫定であつたのが、老人の親切にほだされて遂に一週間近くも滞留することになつた。お蔭で片田舎に獨り歩きしても左程不自由を感じぬ程に耳が馴れたやうな氣がした。但し話にあるやうに、極東から鷄一羽を贈る約束はしなかつた。(終)